

AYANO REPORT 2

前回2017年にレポートを書いてから、2年半が経過しました。

あっという間のような長かったような。密度の濃い2年でした。

今は子育てと暮らしを軸足にしており、メインでは **andadura** には関わっていないのですが、夫の仕事を傍らにみるものとして、作り手でも、伝え手でもない立場として、**andadura** の一面が伝わったらいいなと思いレポート2を書く事にしました。

本来なら夫の事を文章に書くなんて、どこかこっぴどかしいけれど。

シンプルなようでスパイスの効いた製品も、ひょうひょうとしているようでエキセントリックな作り手本人も、一步踏み込んでみなければ伝わらないと思います。

ANDADURA 山本の日頃の姿を切り開いてお伝えしたいと。

そんな気持ちで素直につづります。

興味のある方、読んで頂けると幸いです。

振り返り

2年半を振り返り、大きな事柄がふたつある。

- ・ひとつ、2018年の豪雨により水害で工房が水没し急遽工房移動したこと。
- ・ひとつ、2019年の5月に子どもが生まれたこと。

andadura でいえばもっとあるはずだと思い出してみる。

どうにも豪雨の記憶が鮮烈で、その前のことを思い出すと随分時が経っているような、思い出せないことも多い。

けれど、そこにも日々の軌跡があり、その時その時考えて動いたことがある。

一番大切にしているのは日々のルーティンだと話していた。

毎日のくりかえし。くりかえし。

その積み重ねが一番強いのだ、と。

工房移転も、あかちゃんも。もう予想外の連続で、そのことにどれだけでも目がいってしまふ。それでも日は昇り日が落ちる、一日は変わらない。

その一日の中でなにができるのか。なにをするのか。

行く道に旗をかかげて、毎日を繰り返したい。

そんなことを山本さんは以前からよく話していた。

着の身着のままタイプの私は、最近この言葉の意味が少し分かった気がする。

ほんとに何かを達成したい時、一気にそこには行けない時。

このことばを携えて、一步一步進んで行くことはできる。

広い海を渡る、向かう舟の方角に旗をかかげること。

海の上は嵐の日もあるけれど、偶然辿り着いた港で仲間が増えることもある。

当たり前にあることは、実は奇跡の連続で、とても尊い事なのだという事も自分の身を通した経験であらためて気づいた。

お互いに2年半を重ねて、まだここから見たい景色がある。

その前にすこし振り返ってみる、綾乃レポート。

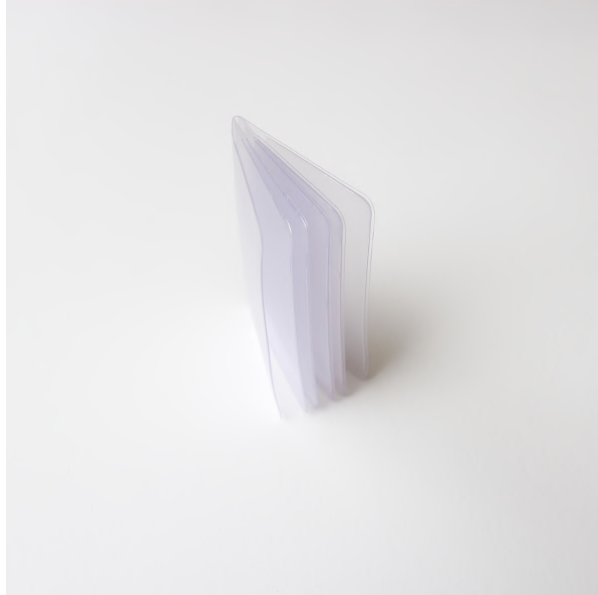


2017年の夏に既存のラインナップを絞り次に向けて動くことになった。
独立当初は、アルファベットの数ラインナップをつくる予定だったらしい。
あたらしいものを生み出すための時間と、環境的なスペースを作るため思い切って商品
を減らことに決め、帆布のシリーズも廃盤にすることになった。
帆布シリーズは山本さんにとって一段と思入れのある製品なのか、彼が使う財布は帆
布財布。ひっぱりつまみが、気に入っていると話していた。
廃盤になる製品は、どこかスポーツ選手の引退に似ている。その人に会えないわけでは
ないけれど、現役を降りる。
次の時代にバトンタッチしていくこと。
あたらしい一歩。

その年、最後の注文とメールをいただいたのが帆布の財布だった。
もう廃盤になるけれど、このお財布が好きです。
ありがたいことばだった。

なんだかよかったな。救われたな。
彼の顔にそんなことばが浮かんでいた。

今回あたらしく出るビニロンシリーズの長財布は、実は帆布シリーズの長財布を元に作
ったものらしい。
また、違う形で息を吹きかえす。
めぐる財布。
作り手を通して、新たに生まれる財布もまた、諸行無常だなあと思う。



ビニロン製品のこと

ビニロンシリーズ「_____に風を通す」のきっかけは、実はPVCのカードケースだ。
シンプルなビニールのカードケースを探していた所、どうしても気に入るものがない。

「ありそうだね。」そういつつ、探せど探せど見つからない。

それって世の中になんてことではないか。

ならば、自分で作ろう。

その流れで工場を探したところ、とても良心的なビニール加工工場と出会った。

ビニール生地といっても、夏と冬では固さがちがうこと。寸法にくるいがないように巻いてある状態のビニールを裁断して一ヶ月寝かせてから加工すること。丁寧な仕事が伝わってくる。

カードケースはシンプルだ。

だからこそ、角のアールをどうするか、真ん中のプレスをどうするか、ひとつひとつのデザインが重要になってくる。少ない要素だからこそ、簡単なようでむずかしい。

工場にある金型を流用する事も提案して頂いたが、妥協しないで金型を作ることにした。
この、カードケースをしっかりと良いものにしよう。

それならば、財布だけでなく、財布まわりのことも使いやすいアイテムができるのではないか。

小さなことから動き出す。

なにか「こと」が動き出すきっかけは実はひょんなところにあったりする。

小さな思いがうねりになって、もともと流れていたうねりが合わさるように形になる。

歩きはじめた、ビニロンシリーズ。

「_____に風を通す」

わたしも、風の方かう先をドキドキと、見守りたい。



冊子のこと

財布からホームページ、タグにいたるまで自分で出来る事はほぼひとりでつくってきた山本さんが、今回はじめて冊子のデザインをデザイナーの松井さんをお願いした。

元を辿れば「デザインをお願いします」ということではなくて、
「一緒に色を探してほしい」という不思議な依頼だった気がする。
そこから、たくさんの対話を重ねて。

出来上がったのが「_____に風を通す」だ。

話を進める中で、製品のかたちもどんどん変わっていき、まるで生き物みたいに流動して形になった。

8月の誕生日に髪を切りに行ってさっぱりしたのか、その日、ビニロンシリーズは「財布に風を通す」という切り口にする決めたって涼しい顔で話していた。その翌週、我が家に尋ねて来てくれることになった青木隼人さんにイラストをお願いして。

水蒸気が水に変わるみたいに、頭に浮かんでいたものが、急速に形になっていく。

冊子の案をみて、

「こんないい衣着せてもらって、ありがとうございます」

と、山本さんは話していた。なんだか、子どものハレの日のようだ。

今までひとりでやっていたことを、誰かとする。

それ自体が風通しがよいみたい、そんなことも話していた。

わたしも冊子の詩を書く事になり、ひとつの風になれただろうか。



「これからニュートラルより、おもしろく」

冊子作りの打ち合わせにて、デザイナー松井さんとの対話の中で浮かび上がってきたことば。

ざっくばらんにいろいろな話をする中で、みえてくるそれぞれの癖や、当たり前が、ポンと崩れたり、変化したりする深い時間だった。

松井さんのデザインはその人の本質をみる。

だからだろうか、山本さんの本質がみえる。

そういえば、出会ったときからおもしろい人だった。

どこで見つけたん！？というものを拾ってきたり。

個性的なコンビニの店員さんを見つけて日々のおもしろいを発見していた。

そうそう、前からそんなだったわ。

肩の力をぬくことって意外にむずかしいのだ。

子どもが言った言葉。

「肩の力を抜いた方がブーメランは飛ぶ」

それはほんとだと思う。

その人らしく、いれたらいい。山本さんも、わたしも。

＊写真は 2011 年 12 月 16 日 andadura diary より

散歩中に見つけたかたち。

「あっ」って言うのと、拾うのがほぼ同時だった。

車が踏みつけて出来た、神業ならぬ車業。



あたらしい場所との出会い

はじめてこの土地に来た時「この家、気になる。」と、山本さんが話していた家があたらしい工房となった。当初は貸す気がないといわれていたこの家。

2年目の春、夜の九時頃急に知り合いのおばちゃんから電話がかかってきて、うちの工房にどうかと聞かれた。翌日に内見して、あれよあれよと話が進む。

「若水」という屋号の家の裏山には、その昔「山本城」という小さなお城があった。名も無き小さなお城らしいが、なんと、その城主のお墓が家の隣に今もある。

なんだか、城主に呼ばれた！？

はたまたここで城主になっていくのか！？

山本という苗字は決して珍しくはないものの、不思議な縁を感じた。

その秋、もう何年も手を付けていないといわれていた広い土地の草刈りをする。

どうやって草刈りしたのだろうとおもうほど急な斜面を協力して刈った。

風景が整うほどに、この土地が喜んでいるような気がする。

かつて、若水に家を建てた人が夢見た風景が浮かぶ気がした。

工房を作るまで一年以上の時間が空いてしまったけど、急遽工房を移転するときこの土地と、この家があったことでどれだけでも救われたのだ。

この家は、私たちの恩人でもある

豪雨のこと

7月6日の深夜、西日本豪雨により工房内に163センチまで水がきた。

直前の夜、一度工房を見るものの、大丈夫だろうと何も引き上げず帰宅した。23時すぎに小田川が決壊したという緊急通知のお知らせが鳴り続ける。もうそのころには工房にも水が入ってしまっていたのだが、自宅のある我が家から車で10分ちょっとの工房の情報がまったく入らない。なんとか大丈夫であってほしい。そう願うことしかできなかった。

あっという間の出来事だったようだ。夜間に30分で水が回ったらしい。泥水の洗濯機に入ってしまったように、工房の中のあらゆるものがドロドロになっていた。道も通れなくなり工房に実際に行けたのは日曜日だった。

山本さんがひとりで確認に行き、帰ってきて言った言葉は

「シャッターを開けたら、オイルの缶が転がってたけえダメなのは分かった。

復旧まで3か月じゃね。まあ大丈夫。」

その様子から思ったより大丈夫だったと思った私は、状況を見てもないのにほっとしたのだった。

翌日、私は気合を入れるため眉毛をかいた。

ところが、変わり果ててしまった工房を見て、化粧なんかしてる場合じゃなかったと唾然としたのだ。そこからは怒涛の時。ぴしっと整っていた昨日までの配置が重ならない。ましてや、もう形すらないものもある。

そんなこと思う暇もなく、とにかく錆びないように金属を運び出し、要るもの、要らないものを主分けする。

近くの人、遠くの人、友人知人、近所の人、知らないボランティア方、たくさんのひとに助けていただいた。

いろんな方に助けていただいたから、今がある。

人の力がどれほどすごいのか、教えていただいたのだった。

今もこの文章を書きながら、あの日の暑さがよみがえる。

泥だらけの工房を前にひとりたった山本さんの気持ちを思うと、今更ながら、胸がぎゅっとなる。



「災い転じて福にする」

あの夏は、泣き言ひとつ言わないで、もくもくと作業していた相方の姿があった。
前をむいて進んで行くしかないし、これをあらたな工房づくりのひとつのきっかけとし
よう。強い気持ちがあった。
豪雨の何日か後に理由は忘れたが大げんかをした。

とりあえず家を飛び出た私は、なんとか ANDADURA のホームページをみた。
デイリーにかかれていた言葉は
「こういう時に一番やってはいけないこと、それは夫婦げんかです」
だった。
なんだかくだらなくて、友人が作ってくれた素麺もたべたいし、とりあえず帰ろう。
そう思ったことを昨日のように思い出す。

大変な方もたくさんいたけど、あの夏のあの風景はどこか昭和の活気があるような不思議なかんじだった。汗水たらしてみんな必死だった。やるしかないんだっていう力が町のそこらじゅうに流れていた。そのことは振り返ると、鮮烈に覚えていたりする。

工房移動

前代未聞の災害にみんなどこかぎゅっと固まるような気持ちを抱えていたとおもう。
そういう時ほど、手を動かすほかない。マンパワーという言葉があるけど、ほんとに人の力が合わさるとすごいスピードで片付いていく。
手伝って下さる方の得意な場所をお願いする。
細かい仕事が得意な方、重いものをもつのが得意の人、人に指示を出すのが上手な人。
ひとはそれぞれ役割があることをそんな中で学んだ。

片付けと同時に工房づくりに向けて動く。
水害はものが乾く前、最初が勝負だと思った。
以下作業の手順。

- ① 工房から要るものを我が家に運び出す。
洗えるものは旧工房の沢からひいた水で洗う
- ② 我が家で洗うものを洗い、状態を整える。
- ③ 整ったら新しい工房に運ぶ。

毎日誰か手伝いにきてくれて、お昼をともに食べる。
みんな忙しい中で。
暑い暑い中で。
力をかしてくれた夏。

以下、こんなかんじで進めた。



工房 ・要るもののや、早急に洗うものの種分け



・工房裏の沢から農業用ポンプで汲み上げて泥を落とす→乾燥



・工房床の泥掃除、いったんすべて出して水で何度か流す



・乾燥→その間に車で10分の自宅に軽く流したものを移動させてさらに洗う



・工房返却前に掃除



・自宅にて細かい部分の洗いと乾燥



・革を拭く→職人の佐藤さんに修正してもらうものとわかる



工房づくり 1

あたらしい工房づくりは、片付けも終わりの見えてきた8月の頭から入った。
業者さんはどこもいっぱいですぐにお願いできる状況ではなく、ならば、自分でやってみよう。そこからはじまった。

今回の工房は長く使うことのできる工房。

「やったことは自分の技術になる、これもまた災い転じて福にするひとつだ」
と山本さんは話した。

器用だからなんとかかなるだろうとわたしは思っていたけど、道具を買いそろえるところからはじめることになる。やったことないから、建築の方、大工さん、いろいろな人に話を聞きまわり。YouTube を先生として、作業の終わった夜はいつも新工房のことを考えていた姿を思い出す。

配置、床の材、壁のこと、具体的なひとつひとつをイメージして決めていくらしい。

この場所がどんなところになるか。

この工房がどんなふうになるか。

つかの間の宙ぶらりんの時間。

2018年の8月はいつもよりも暑くなく。

頭にはちまきのように手ぬぐいをまき、工房づくりがはじまった。

工房づくり以後、はちまきをしないと動けない身体になったらしい。

工房づくり 2

工房をどんな風につくるか、方向は決まった。

床をつくること。

窓をあけること。

奥にある建物とつなぐこと。

工房作りは、料理にも似ていて、段取り八割だなあと思った。

慣れない左官仕事に時間がかかり、たたき作りだけで終わった日もある。

少しずつ進んでいるはずだけど、景色は大して変わらないなあなんて思う事も。

でも、その少しが積み重なって、ある時がらりと景色が変わる日もあるのだ。

だから、ものをつくるのは面白いのかもしれない。

ある時はヘルメットをかぶり電動のこぎりを持つ。

ある時はへら片手に土を塗る。

革やミシンが少し違う道具になっただけで、向き合い方は変わらない、そんな気がした。



・もともとの倉庫。知り合いの方にアドバイスをいただきながら、どんな風にするかイメージし決めていく。



・入っていた農機具を片付け、窓等あける場所を決める。



・大引を設置して家具職人の友人と窓枠の打ち合わせ、窓の取り付け場所の壁を切る。



・グラインダーで外壁をで切る、



・壁を切り取った状態



・断熱材を入れて合板を貼る。



・床材を借り貼りして、本貼りする



・床を張り終えて、一旦作業できるように道具を中に入れる。

工房作り 3

床が仕上がり、仕事ができるように一旦機材を中にいれる。

この時点で10月半ばとなり豪雨から3ヶ月半程度かかった。

中盤的一幕がおり、ここからは後半戦。

家具職人の友人、左官さん、板金屋さん、水道屋さん。後半戦は業者さんにお世話になった。これがまた前半とは違う苦境がひと山、ふた山あったようだ。

山本さんの頭の中にあった工房のイメージが形になっていく。

その中でも印象的だったことは「台形の窓」だ。

長方形の窓をつくるため壁を切ってみたら予想外に筋交いが出てきた。

さて、どうするか。

筋交いを切ったら窓の強度が弱くなるし、どうしたものかと思っていたら。

「みえた！台形の窓にすることに決めた！」

と。

絶対によくなるイメージしかない、と自信満々の様子。

イメージの浮かばない私はなんども止めたけど、ようやくできた窓をみて思った。

思いもよらない事が、導いてくれる形がある。

その時やってきた課題を即興で答えていく。

イメージを超えていくときはそんなときなのかもしれない。



・壁を切ったら筋交いが出てきた窓。



・パネルを貼って、その上に職人さんが土壁を塗る。ずいぶん窓らしくなってきた。



・左官職人さんに仕上げてもらい見事に窓スペースが出来上がる。あとは窓が届くのみ。



・2019の年賀状はこちらの写真になりました。



工房作り最終章

ようやくできた工房。

残すは窓のみ。

と、ここからがとても長かったのです。

結論から言うと、一冬窓がなかったのだが、そこから山本さんは学んだことがあったらしい。

ここからは andadura dairy より。

↓
↓
↓

ず〜っと、ず〜と言いたかった一言を言います。

復活しました！

これまで、作業再開と、ごにゃごにゃした言葉で書いておりましたが、工房に建具も入り、ビニールシートも取り払われ、落ち着いた状態で、制作出来るようになりました。これを復活と呼ばず、何という。

復活までの9ヶ月、とっても長かったです。

自分の中では、制作再開までの3ヶ月は前半戦。

そこからは後半戦と呼んでおり、

後半戦がなかなか、厳しい時間でした。

なんだか自分がすっからかんになったような気がします。

ですので、復活し、これからしっかりと歩んでいきたいという思いから、
ブログ書いております。

前半戦は、前にも心情を書いておりますので、
ここでは書きませんが、
後半戦の事についてはあまり書いてなかったと思います。

今でもどう書いたら、良いのかは少々戸惑っておりますが、
書きます。

後半戦は、言うならば宙ぶらりんな時間でした。

水没して2ヶ月くらいの時に、災害関係の本を呼んで、
精神状態などがどのようになるのか、知っておこうと思い、
何冊か読み、中井久夫さんの「災害がほんとうに襲った時」という
本の中に、4ヶ月の壁の話がありました。
緊張状態が続くと、4ヶ月くらいで伸びきったゴムのようになる、
と書いており、そうならないよう注意しようと、なるべく休み、リラックスす
るように
心がけておりましたが、

やはり、私も人間。休んだとて、やってきました。4ヶ月の壁が。
12月位から、急にキツくなってきました。

通常の時であれば、建具がなくても先に進もうと思えるのですが、
新しく上がった革が、根本から見直さなくては、というものでしたし、
革自体も磨きが入りにくかったり、今までの作り方ではうまくいかず、
制作に1.4倍くらいかかるようになりました。

革のベースを実験的に試したり、薬剤を研究したりして
制作やら、革やらのベース部分の見直しが必要になりました。
となると、活動のベース部分が揺らぎ、
この状況では先に進むより、空中分解しないよう、
しっかりと目の前の事に取り組もうと思いました。

制作に時間がかかるなら、じっくり時間をかけて、

革の見直しも一つ一つ、丁寧に。

そして、建具が入って、一つ終わったら、また一つと進めて行こうと決めました。

アントニオ猪木はこう言ってます。

「ピンチというのは、ひとつのものじゃなくて、いろんなヤっカイな事がダメになって

やってくる。だからみんな負けちゃう。そのダメを一つずつやっつけていけば、ピンチってのは必ず乗り切れる。」と

なので、僕が一つ一つというのは、ピンチの乗り切り方にアントニオ案を採用したからです。良い言葉を覚えているものですね。

そして、建具は当初12月に入る予定でしたが、

おそらく様々な理由で5、6回くらい延期になりました。

建具が入ったら次に行こうという、目標設定が肩透かしをくらって、なかなか前に進んで行かない。「この日に入る！」っていう日程が遅れるほど、その回数が増えるほど、厳しさは増していったように思う。

建具は大学の友人に頼んでおり、12月に友人は大きな怪我をしてしまい、お見舞いに行ったのですが、しみじみと「お互い今年は不思議な年だったね。」と振り返りました。

別に誰も悪くないし、工房に入った建具を眺めていると、とっても良い仕事をしてくれたと思う。これからの時間を支えてくれるだろうと
感じる。

共同で何かを作る喜びや、デザインすることの楽しさも存分に味わった。
自分が共同作業がこんなに好きだったんだ、
デザイン楽しい！というのはすごく新鮮な発見でした。

改めて、時間がたった今、自分には何が出来たんだろう、と問いかけてみる。

今から考えれば、建具がなくなっただけ、いろいろ先のことやれば良かったじゃん、とも思う。でも当時は、そんな延び延びになるとは

つゆ知らず。

それでも、自分に出来た事と言えば、おそらく自分の事を伝える事だったと思う。キツイならキツイと伝え、しっかり自分の事を伝えても何も変わらなかったかもしれないけど、それでも、伝える事が大切だった。

改めて思い返すと、これまで自分の事を伝える事は、あまりやってこなかったような気がする。自分で何とかする、と全部自分の肩に乗っていた気がする。怪人ショイコマーってやつです。

僕が後半戦で学んだ事があるとすれば、伝える事の大切さです。なので、その部分は変わりたいと思います。

そう思うから、こうやってありのまま書いている訳です。
(変化しまっせっていう、宣言みたいなものです。)

本当は、

ふっつつつかあ～～つ

って復活の際には書こうと&書きたいと思ってましたが、少し静かに、復活しました。ってのが今の気分です。

とにかくにも、活動が止まると、流れみたいなものも止まる。過去の事は水に流して（ブラックジョーク？）ひとつひとつ動かしていきたいと、思う所存でございます。



工房を移転したあとも、私はときどき元工房に行く。

あたらしい工房ができたとき。

子どもがうまれたとき。

工房と、その大家さんに報告する。

この場所は、そんな場所だ。



育つ工房

最近の山本さんは山野草にはまっている。

はまっている、というよりほんとにすきらしい。

工房を移してからというもの、園芸家のように手塩にかける植物が増えている。

最近では、近所のおっちゃんたちが展示している「山野草展」にいて、あれこれ植物について質問し。車にバケツとスコップを乗せて、いつでも植物を採取できるようにしてある。

採取してきた植物は庭に植えて、節々のたのしみになっているようだ。

風景が変わる。

みたい風景がある。

まだただけど、草木もその心を知っているかのように、山本さんの庭木愛にちゃんと答えてくれているようだ。



草を刈って、庭に風を通す

工房を整頓して、仕事場に風を通す

そのことが制作すべてにいきてくるらしい

生きる事とつくることが渾然一体となっている。



そんな毎日

ヘルメット姿に息子を抱いて。

颯爽とあるく畑。

そんな姿見たら、あわててシャッターを切ってしまう。

やっぱり、山本という生き物だ。

一艘の舟が嵐の中、帆を下ろし、じっと外の様子をみている。

大雨に風、荒れる海。

それでも、舟の中では毎日漁をする道具を磨き、ごはんをつくり、次の漁に向け動く。

ある日の夕方、ようやく外に虹が出た。

キャプテンは帆を揚げ、風が舟を進ませる。

あらたな港で仲間をのせて。

また舟はすすむ。

この2年半はこんな短い物語のようでもあった。

嵐の時に気づく。

どんなときも、舟が海に出せること事態が奇跡のようで、当たり前にあることがどれだけ尊く、たくさんの人に支えられているかということ。

晴れたときに気づく。

からりとした心地よさ、何はなくとも天気ひとつで気分が良くなること。

風がふいた時に気づく。

向かい風も追い風も、その風を受けて舟は進むということ。

なんだか思うように進まなくて、舟でいえば穴の開いた状態の時もある。

先日、「我が家は穴の開いた舟みたいだね」なんて話をしたところで。

あ！そんなところに、わざわざやってきた息子がいるんだなあと。

豪華客船だってあるのに、この舟にやってくれたんだなあと。

なんだかよく分からないけれど、顔をあわせて笑ってしまった。

我が家の舟は立派ではないけど、自分のすきな形はしているとおもう。

息子がそこに加わって、どんな舟になるのか。

それぞれにあたためながら、ひとつとなる日がくるのだろうか。

またここから。



伝う風が

合わさって

風を通して

混ざり合う

風と歩いて行く先に

あらたな灯り生まれ出づ